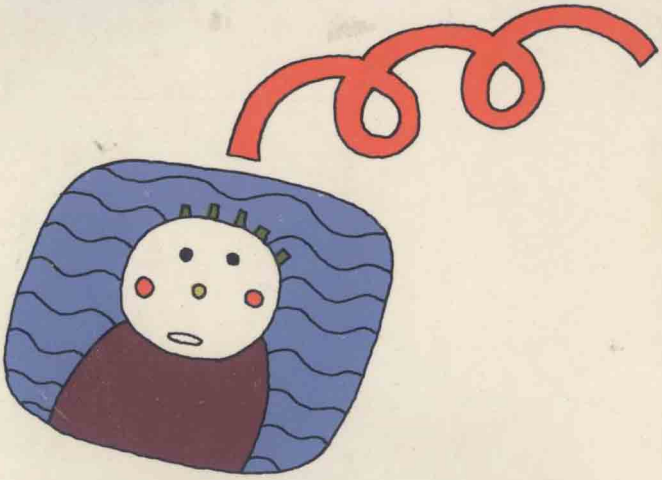
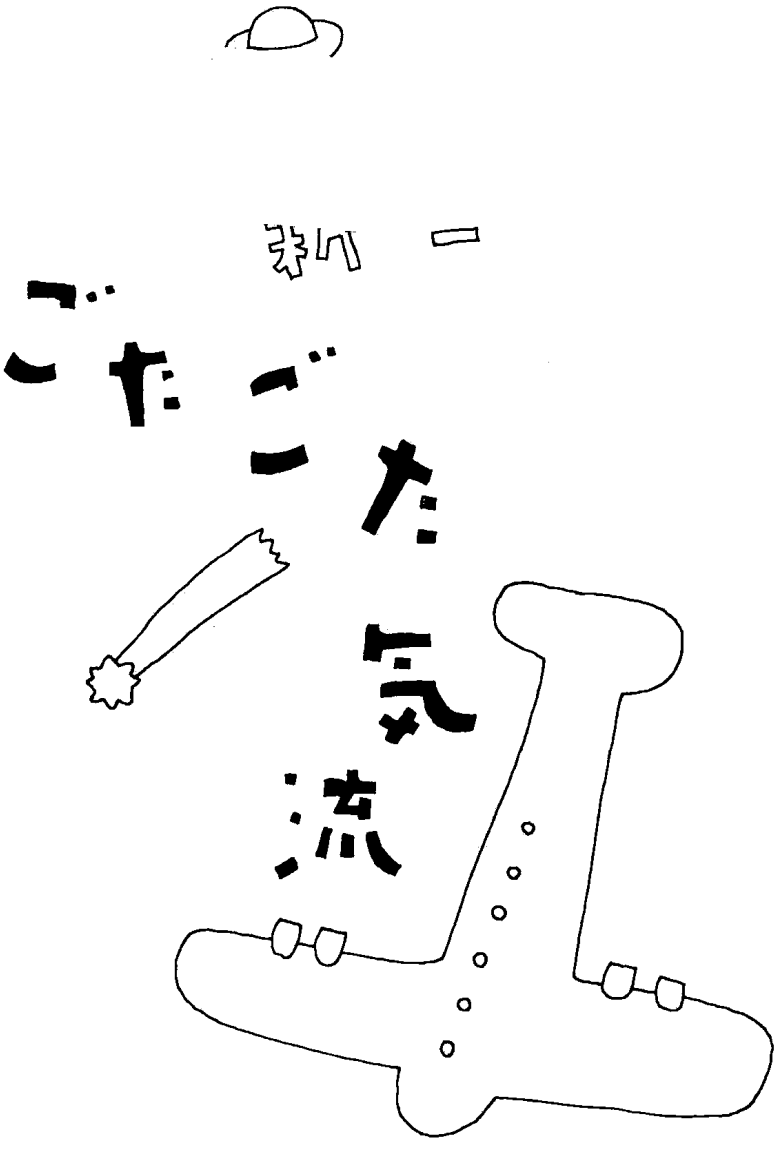
星新一

ごたごた気流





弥生 一

ごたごた気流

講談社

ごたごた気流

昭和49年3月20日　第1刷発行
昭和49年5月28日　第4刷発行

著　者　星新一
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21／郵便番号112
電話東京(03)945-1111(大代表)
振替東京3930
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

©Shin-ichi Hoshi 1974, Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

定価はカバーに表示してあります　(文1)

ごたごた気流・目　次

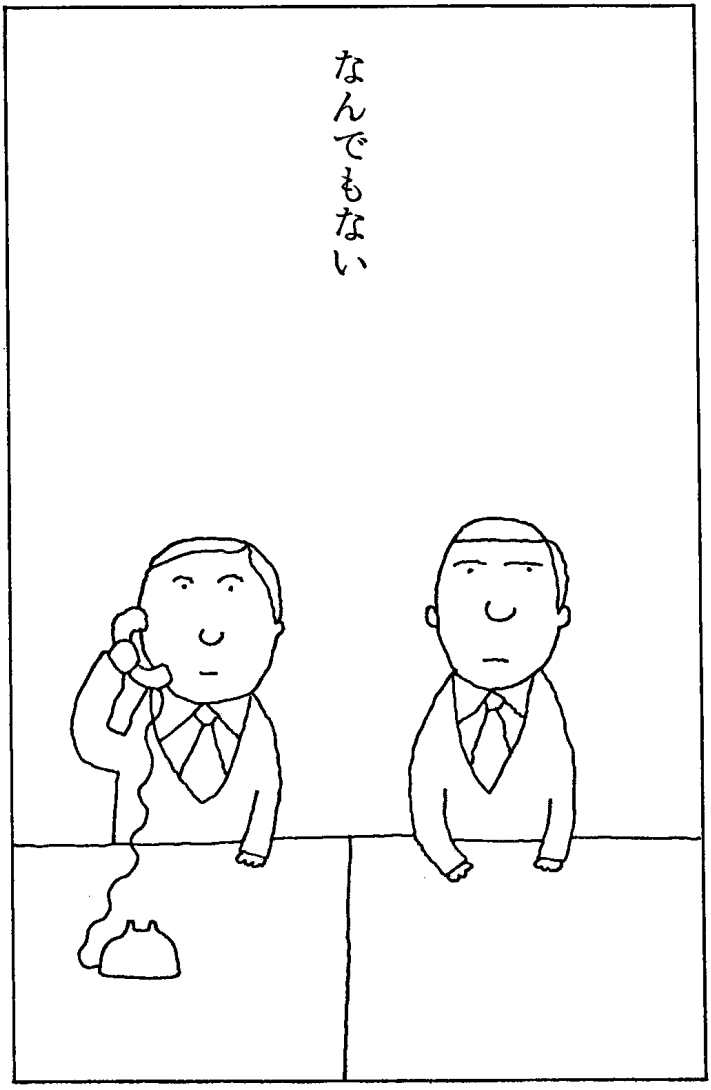
なんでもない　7
見物の人　25
すなおな性格　49
命の恩人　75
重なった情景　95
追跡　121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

条件　135
追究する男　145
まわれ右　173
品種改良　187
門のある家　197
ごたごた気流　227

装幀・挿画　和田　誠

ごたごた気流


なんでもない

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その青年は、ある会社の社員だった。順調で活気にみちた企業だったが、青年そのものは、おとなしく平凡だった。精力的に動きまわるとか、なみはずれた才能をあらわすことなどないかわり、大失敗をやらかすこともなかった。

しかし、会社において彼と机を並べている同僚は、やや性質がちがっていた。くだらない冗談が好きで、時には度を越した悪ふざけに至ることがある。

そのたびに青年は腹を立てるが、絶交状態にはならず、仲はそう悪くないのだった。二人の性質のちがいが、一種の調和となっているせいかもしれない。共通点が多すぎると、ライバル意識ができ、かえって対立することにもなる。しかし、そんなことはどうでもいい……。

その時も、そうだった。

机にむかって青年が書類を作成していると、となりの同僚が、しきりになにか話しかけてきた。週刊誌をにぎわせている有名人の離婚事件をたねに、あくどい笑い話に仕上げたものだっ

た。青年は適当に聞き流していた。
同僚の話し声が、ふと、とぎれた。うるさいのも気になるが、不意に静かになったというのも、これまた気になる。青年はそっちを見た。同僚が電話の受話器を戻すところだった。応答をした声は聞かなかったようだが、短い用件だったためだろう。少し顔が青ざめ、だまってしまったままだ。異様な空気がそこにあった。青年は声をかけた。
「どうかしたのか」
「いや、なんでもない」
「知りあいに、なにかがおこったのか」
「ちがう」
「女性関係のことか」
「そんなことじゃない」
いままではしゃいでいたのがうそのように、同僚は沈んだ表情になっていた。答える気力もないといった感じだった。あまり突っこんで聞かないほうがいいように思えた。青年はなぐさめの意味で言った。
「急用ができたのなら、帰ったらどうだい。仕事なら、かわってやってやるぜ」
「いや、急用なんかじゃないんだ」

さっぱりわからなかった。同僚は退社までの時間、机にむかって考えこんだままだった。青年は気になってならなかった。

それは、つぎの日にも持ち越された。その同僚はめっきり口数が少なくなり、青年のほうから話しかけることになった。こうなると、かえって気の毒になる。

「なんだか元気がないようだな。しっかりしろよ」

「ああ」

「帰りに、どこかで一杯やろう」

「ありがとう」

まったく、たよりなかった。バーに寄っても同様だった。グラスを重ねても、いっこうに陽気にならない。ついに青年は言った。

「なにか心配ごとがあるのなら、打ちあけてくれ。ぼくにできることなら、なんとか力になるよ」

「いや、なんでもないんだ」

だが、なにかあることは確実だ。ほっとけない気分。青年は同情した。しかも、事情がよくわからないとくる。話したがらないのは、きみひとりの手におえないことなのだ、という理由からかもしれなかった。

周囲の者たちが、彼の気をひきたたせるようにしなければならない。青年はそう思った。まず、部長の耳に入れておくべきだろう。また、悩みをかかえこんでいる人間に、微妙な仕事をまかせてはことだ。それは一時的に、こっちへまわして下さい。そんなことを申し出るつもりだった。

しかし、なかなかチャンスがなかった。部長が席にいて、その同僚が席をはずした時でないと、話がしにくくなる。それを求めて、青年は少しいらいらした。

やっと同僚が外出した。しかし、部長のほうは、忙しがってさかんに電話をかけている。このままではしようがない。青年は部長の机のそばへ行って待つことにした。その電話が終る。部長は、立っている青年のほうをむいて言った。

「なんだ……」

だが、その時。部長の机の上の電話が鳴った。それを取って耳に当て、なにも言わず、部長はもとへ戻した。それは、ほんのわずかな時間だった。しかし、変化がおこっていた。部長の顔は青ざめ、深刻そうな表情だった。そばに人の立っているのが、目に入らないようすだった。青年は軽くせきをしてみたが、反応はなかった。思い切って言う。

「いまの電話は、なにか重大なことだったのでしょうか」

「いや、なんでもない」

「仕事に関することでしたら、打ちあけて下さい。どんな努力でもします。それが社員としてのつとめです」

「そんなことではないんだ。気にしないでくれ」

しゃべるのさえつらそうだった。さっきまでの勢いが、どこかへ消えてしまったかのようだ。こうなると、れいの同僚の件を切り出すどころではなかった。

青年は席へ戻る。どういうことなのだ、これは。部長はなにを聞いたのだろう。気にしないでくれと言われたが、そうもいかない。あれは、ただごとではない。まるで、そう、先日の同僚の場合とそっくりだ。青年の感情は、同情からもうひとつ進んだものへと変化した。それは好奇心。

いろいろと考えたあげく、青年はひとつの仮定にたどりついた。いずれも恐喝のたぐいではなかろうかと。二人とも、なにか個人的な弱みをにぎられ、おどされたのかもしれない。他人に話したがらないのは、そのためかもしれない。

となると難問だ。警察へ行って相談すべきだろうが、弱みのたねによっては、へたをすると当人のためにならない場合だってある。どんな弱みで、どうゆすられているのか、まったく見当がつかなかった。

青年は、学校時代の同級生で、いま弁護士になっている者のあることを思い出した。そうい

えば、優秀なうえに迫力のあるやつだった。彼に相談し、恐喝対処法の要領とでもいったことを聞き、それを、それとなく部長や同僚に話してみるとするか。

会社の帰りがけに、青年はその弁護士事務所へ寄ってみた。あるビルのなかの一室で、かなり景気がよさそうだった。助手らしいのを二人ほどおいていた。お客も多かった。しかし、べつに急ぐことでもないので、青年は待つことにした。

かなり待たされた。青年はやっと面会することができた。友人の弁護士は、大げさな身ぶりで言った。

「いやあ、待たせてすまない。しばらくだな。なにしろ忙しくてね。もっと大きな室に移らなければならなくなりそうだ。おかげさまでと言いたいところだが、こういう商売、それを喜んでいいのかどうかだね。しかし、そんなこと考えはじめたら、どんな仕事も成立しなくなってしまう。で、なにか事件かい。きみのことだ。大サービスでやってあげるぜ」

貫禄のある笑い方が、言葉の各所にちりばめられていた。青年は口ごもりながら、話しはじめた。

「ぼくについてのことじゃないんだ。よく説明しにくいんだが、じつは……」

その時、机の上の電話が鳴った。それから先は、なにもかも同僚や上役の場合と同じだった。受話器を戻した時には、人が変ったようになっていた。青年は聞かずにはいられなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com